

『東北の 峠で感動 吉田松陰』



吉田 松陰
(1830~1859)

吉田松陰は、嘉永4年（1851）12月から4月にかけて東北各地を巡り歩いた幕末の思想家です。嘉永5年2月29日に60cm以上の残雪の中、弘前を目指して矢立峠を越えました。ここで、相馬大作事件（矢立地区の岩抜山で起きた津軽藩主暗殺未遂事件）を想い漢詩をよんだことが、東北遊日記に詳しく記されています。

吉田松陰の漢詩

嘉永五年二八五二この峠を訪れた吉田松陰は相馬大作の志に感動して次のような漢詩を詠んだ

両山屹立して屏風の如く、
一溪屈曲して其の中を流る。
山窮き水極まり路なからんと欲し、
矢立の嶺其の衝に当たると。
杉檜天を掩ひて昼また暗く、
天絶険を以て二邦を疆る。
聞くならく文政辛巳の歳、
津軽、藩に就かんとし此の際を過ぐ。
南部の逋臣米將真、
徒を糾め過輿の衝を要せんと欲す。
幾日の徘徊人視を驚かし、
敗露忽ち空し数年の計。
地の利人の和両つながら之れを得、
自ら謂ふ籌画万遺すところなしと。
言ふを休めよ奇変は意外に出づと、
一持はつねに百禍と随ふ。
君聞かずや韜鈴の上乗一句に存す、
初めは処女の如く後には脱兎と。

東北遊日記

吉田松陰

下斗米の事は余曾て之れを山鹿素水に聞き、之れを安芸五蔵に質せり。向に水府に在りしとき、藤田虎之助著はず所の伝を讀む。今又其の土人に聞き、其の志に感じ、其の事の遂げざりしを惜しみ、慨然として詩を作る。云はく、

両山屹立して屏風の如く、
一溪屈曲して其の中を流る。
山窮き水極まり路なからんと欲し、
矢立の嶺其の衝に当たると。
杉檜天を掩ひて昼また暗く、
天絶険を以て二邦を疆る。
聞くならく文政辛巳の歳、
津軽、藩に就かんとし此の際を過ぐ。
南部の逋臣米將真、
徒を糾め過輿の衝を要せんと欲す。
幾日の徘徊人視を驚かし、
敗露忽ち空し数年の計。
地の利人の和両つながら之れを得、
自ら謂ふ籌画万遺すところなしと。
言ふを休めよ奇変は意外に出づと、
一持はつねに百禍と随ふ。
君聞かずや韜鈴の上乗一句に存す、
初めは処女の如く後には脱兎と。

矢立峠を一躍、天下に有名にしたのは相馬大作事件である。
嘉永五年二八五二閏二月二十九日この峠にたどりついた松陰は、右のような日記を残している。年若い彼にとって矢立峠は義士の聖地であった。